

VIII章 総括

発掘調査の結果から、遺構に関して1項目「円形の陥し穴とみられる土坑について」、遺物に関して3項目「I群a類土器について」、「トランシェ様石器について」、「石器石材について」総括する。

それぞれ、土坑については、道内、東北北部の類例から、土坑の時期と分布状況について検討した。I群a類土器については、貝殻腹縁文について精査した。トランシェ様石器については、使用されているものの分析からどのような形態を目的として製作されたのか、統計的に推定する。さらに接合資料からの検討と出土遺跡の分析に加え、使用痕分析を行った。石器石材については、大釜谷産頁岩の特徴について述べる。本調査により、上記のように資料が増加し、遺構、遺物の詳細が明らかとなった。

1 円形の陥し穴とみられる土坑について

調査において、平面形が坑口で円形または楕円形、坑底では隅丸方形～楕円形を呈し、断面は漏斗状、ピーカー状を呈する土坑を6基（P-4、7、13、17、18、19）検出した。検出面からの深さは0.8～1.68mで、覆土は自然堆積と崩落堆積を繰り返す様相を見せる。うち3基（P-4、13、19）には坑底中央に柱穴状のピットがある。いずれも出土遺物がほとんどない。これらは断面形態、堆積、遺物出土状況において特に類似している。さらにP-4と7、13と17、18と19は柱穴状の小土坑のあるなしで対となり、間隔が18～20mで北西～南東方向に配列されているかのようである。

同様な遺構は道内では、函館市亀田中野2遺跡において7基検出されている。平面形は円形～楕円形、坑底は隅丸方形～不整な円形であり、すべてが坑底の中央に柱穴状の小ピットを伴うものである。坪井睦美はこれらの土坑が7.0～11.5mの間隔をおいて列状に配置されていること、丘陵の縁辺に立地していることに加え、岩手県五庵I遺跡例などの形態上の類似から、陥し穴である可能性を指摘している（坪井2013）。時期については、覆土中から出土した炭化材の年代から、縄文時代のものとされている。

同様な土坑は東北北部で多く、イノシシを対象とした陥し穴（福田1982）に似ている。岩手県では田村莊一により、陥し穴の集成から地域性、時期に関する検討が行われている。それによると、C型と分類された円形の陥し穴は、岩手県北部で多く検出されること、ほとんどが弧状か直線状に等間隔に並列している場合が多いこと、縄文時代前期初頭から中葉に相当する降下テフラ、中掘浮石の検出される県北部の例は、このテフラ降下以前の構築であることが指摘されている（田村1987）。

青森県櫛引遺跡では、坂本真弓、杉野森淳子が行った青森県周辺の陥し穴集成（坂本・杉野森1997）を元に、小山浩平がこの円形の土坑について岩手、秋田、青森の三県で集成を行っている（小山2000）。小山は、覆土中に前述の中掘浮石が堆積し、さらにその下位に縄文時代早期の包含層が堆積する例があることから、これらの円形の陥し穴の構築時期が縄文時代早期中葉であることを指摘している。表VIII-1は坂本、杉野森が作成した一覧表から円形の陥し穴（C型）を抽出し、構築時期と思われる中掘浮石降下以前の貝殻文土器、及び縄文時代早期末～前期にかけての尖底土器の出土の有無について書き加え、秋田県における例を追加したものである。さらに、田村の指摘による形態の地域性である、

岩手県南部に多い＝平面形方形気味・底面に直径20～30cmの柱穴＝C I

岩手県北部に多い＝平面形円形・底面に直径10cm未満の杭穴、かつ複数多い＝C II
の有無を確認した。なお集成にあるものの報告書を確認できなかったものは一覧からはずしてあるも

表Ⅷ-1 円形の陥し穴一覧

	遺跡名	市町村名	検出数	C I	C II	時期	配列関係	標高(m)	目録文土器	早期末・縄文前期尖底	発行年	文献
北海道	豊原 2	函館市	3				平行・連続配置	46	○	◎	1994	市教育委員会
	亀田中野	函館市	7	○		縄文時代(炭素年代)	直交・直線配列	85～87	—	—	2013	函館事業団第10輯
	新道 4	木古内町	1			時期不明	なし	17	—	—	1984	北埋調報43
	釜谷 8	木古内町	6	○		早期中葉か	直交・直線配列	85	○	△	2013	北埋調報305
青森県	寺山 3	十和田市	7		○	前期以前(覆土に中掘浮石)	直交・直線配列	74～90	—	—	1998	青埋報235集
	平窪(2)	十和田市	2		○	前期以前(覆土に中掘浮石)		57～58	○	○	1998	青埋報235集
	小田内沼(1)	三沢市	5		○	前期以前(覆土に中掘浮石)	直交・緩S字配列	25～26	○	—	1988	青埋報107集
	鴨平(1)	八戸市	3	○	○			200	○	△	1983	青埋報72集
	長者森	八戸市	1		○	前期以前		65	○	○	1983	青埋報74集
	鶴窪	八戸市	15	○	○	早期末葉～前期前葉(中掘浮石以下)	平行・弧状配列	45～54	◎	○	1983	県埋文調報76
	白山平(2)	八戸市	1		○	記載なし		94	—	△	1984	青埋報85集
	弥次郎窪	八戸市	4		○	記載なし	平行・弧状配列	39	○	○	1990	青埋報128集
	櫛引	八戸市	28		○		尾根上弧状配列	86	◎	—	1999	青埋報263集
	長七谷地 7	八戸市	3		○	掘り込み面から縄文早期末葉(1号)	平行?	14～20	△	◎	1982	八埋報8集
	水吉	南郷村	4			前期以前(中掘浮石以下)		169	—	—	1998	青埋報245集
	大堤Ⅱ	軽米町	15		○	早期中葉～前期前葉(中掘浮石以下)	平行・弧状配列	245～255	—	—	1987	県文化振興事業団報告書119集
	駒坂	軽米町	8		○	縄文時代前期前葉以前(中掘浮石以下)		300	—	○	1986	県文化振興事業団報告書98集
	丸木橋	九戸村	1	○		縄文時代	なし	220	○	—	1993	県文化振興事業団報告書189集
岩手県	青久保	二戸市	1		○	不明	なし	263	—	—	1987	岩文報118集
	親久保Ⅱ	二戸市	1		○	不明	なし	187	—	○	1987	岩文報115集
	親久保Ⅲ	二戸市	3	○		不明	直交・弧状配置	194～204	○	○	1987	岩文報115集
	大久保	二戸市	24	○	○	縄文時代早期中葉	山すそに沿って並ぶ	304～322	◎	○	1986	県文化振興事業団報告書101集
	飛鳥台地Ⅰ	浄法寺町	11	○	○	大5は前期前葉以前		200～220	○	○	1987	県文化振興事業団報告書101集
	柿ノ木Ⅲ	浄法寺町	3		○	不明		276	—	○	1985	県文化振興事業団報告書89集
	桂平	浄法寺町	19	○	○	縄文時代	概ね平行か	235～240	△	○	1986	県文化振興事業団報告書110集
	五庵Ⅰ	浄法寺町	35		○	縄文時代	直交、平行あり	240～250	○	○	1985	県文化振興事業団報告書97集
	田余内Ⅰ	浄法寺町	3		○	縄文前半期?	平行	255	○	○	1986	県文化振興事業団報告書105集
	耳取	滝沢村	5			縄文時代	?	144～146	○	◎	1986	村文化財調査報告書第3集
	前九年Ⅰ	盛岡市	1	○		不明		139	—	?	1979	県文化振興事業団報告書35集
	栗田Ⅲ	紫波町	6	○		早期以降	配列あるが関係不明	133～135	—	△	1982	県文化財調査報告書第69集
	田頭	紫波町	2		○	不明	?	102	—	—	1979	県文化財調査報告書第35集
	西田	紫波町	5	○		不明、早期中葉か	南部地区に集中するが配列不明	102～104	○	—	1980	県文化財調査報告書第51集
	中屋敷	北上市	1	○		時期不明	なし	126	○	○	1993	県文化振興事業団報告書182集
	菅田	北上市	9	○	○	時期不明	平行～斜行	72～76	—	—	1991	市文化財調査報告書第64集
	法量野Ⅰ	北上市	5	○	○	時期不明	弧状配置、等高線不明	127	—	—	1993	県文化振興事業団報告書182集
	八幡野Ⅱ	北上市	1		○	時期不明	なし	127	—	—	1993	県文化振興事業団報告書183集
	石曽根	北上市	20	○	○	縄文時代前期以前(中掘浮石以前)	尾根上弧状配列	124～127	—	○	1992	県文化振興事業団報告書165集
	梅ノ木Ⅳ	北上市	4	○		平安時代以前(包含層は大木7b～8aのみ)	不明	111～112	—	—	1981	県文化財調査報告書第58集
	林崎館	北上市	18	○	○	縄文時代中期後葉	大・平行、小直交	127～130	—	—	1992	県文化振興事業団報告書163集
	本郷	北上市	35	○	○	縄文時代・石鍾、断面△すり石有	配列有	123～130	—	—	1992	県文化振興事業団報告書164集
	高瀬Ⅰ	遠野市	4	○	○	縄文時代		269～273	△	—	1992	県文化振興事業団報告書155集
	蓬田	遠野市	3	○		時期不明	小型・配列不明	265	—	—	1991	市埋蔵文化財調査報告書第3集
	田中Ⅳ	久慈市	1		○	縄文時代	なし	48	—	—	1987	県文化振興事業団報告書117集
	川口Ⅰ	岩手町	9		○	縄文時代	平行・弧状配列	212	—	○	1984	県埋文センター報告書83集
	館山	金ケ崎町	41	○	○	時期不明・平安期の可能性もあり?	配列不明	80～90	—	—	1983	県埋文センター報告書65集
	笹間館	花巻市	26	○	○	縄文時代	直線・等間隔	99～101	△	△	1988	県文化振興事業団報告書124集
	南矢中	水沢市	1		○	不明	なし	66	—	—	1981	県文化財報告第60集
	岩崎台遺跡	北上市	90	○	○	縄文時代	集中するが配列不明	100～107	△	△	1995	岩文報214集
	岩角子久保Ⅵ	軽米町	11			不明	集中するが配列不明	250～253	—	—	1988	県文化振興事業団報告書129集
	水吉Ⅵ	軽米町	21		○	縄文時代	平行・弧状配列	102～105	△	△	1996	県文化振興事業団報告書219集
秋田県	太田谷地館	鹿角市	3	○		縄文時代	直交配列か	155～156	—	○	1989	県教委第183集
	半仙	協和町	5	○	○	時期不明	配列不明	29～31	—	○	1989	県教委第180集
	石坂台Ⅳ	河辺町	3	○	○	時期不明	配列不明	45～49	—	—	1988	県教委第150集
	寒川Ⅰ	能代市	4	○		早期末葉～前期前葉	配列不明	15～17	—	◎	1988	県教委第180集

のものもある。

この一覧表からは、円形の陥し穴が検出された54遺跡中半数以上の34遺跡において、構築時期とみられる縄文時代早期もしくは前期初頭の土器がわずかでも出土していることがわかる。また、中掘浮石以前と確認できるものは増加していることに加え、北海道においては岩手県北部、青森県に多いCⅡタイプはこれまでのところ検出されていないことは先行研究の指摘どおりである。

本遺跡例も類例から縄文時代早期中葉から縄文時代前期初頭にかけて機能していた陥し穴であろう。函館市亀田中野2遺跡例も1点ではあるが、縄文時代早期～前期前半に伴う断面三角形のすり石が出土しており、近くに同期の遺跡があった可能性は高い。大泰司統はすでにこの円形の陥し穴が北海道

にも存在する可能性のあることを指摘しており（大泰司2007）、類例は今後も増加すると推定される。

しかし、覆土から出土した炭化物の放射性炭素年代は顕著に異なっている。本遺跡P-4坑底直上から出土した炭化物の年代は $5,640 \pm 30 \text{yrBP}$ であり、亀田中野2遺跡例の覆土中炭化物の年代は $3,967 \pm 24 \sim 5,154 \pm 27 \text{yrBP}$ となっている。ともに誤差を最大限に換算しても数千年も埋まらなかったことになる。やや無理があるうえ、混入としてしまうとしても確認例が多い。この点については引き続き検証が必要である。

2 遺物について

（1）I群a類土器について

本遺跡から出土したI群a類土器は、貝殻条痕文、腹縁文、爪形の刺突文を持ち、尖底の器形を呈するものがあることから道内ではノダップI式、国療（国立療養所）裏I群に相当するものとみられる。出土総点数は約1,800点とわずかであるうえ器形全体がわかる復元個体はないが、道内ではいまだ出土資料が少ないものであるため、本遺跡出土資料からわかることについて示しておく。

東北北部においては、これらの土器は白浜式もしくは寺の沢式を中心とし、吹切沢式、蛭沢AⅡ式、鳥木沢式に相当する可能性のあるものを若干混じるものである。中心となる白浜、寺の沢式の編年関係は、後続する物見台式～吹切沢式の位置づけを巡るいわゆる「同系・異系統論」、また先行する日計～蛇王洞式にかけての文様系統がどのように変遷するかに関して、また白浜式と寺の沢式についても文様系統の変遷に関し見解が分かれ、研究者間で意見の一致がない状態となっている（研究史については、領塚2008が詳しい）。

本遺跡の出土例は、ノダップI式にみられた粘土のまくれを伴う多段の爪形刺突文が少なく、さらに爪形文が縄文とともに施文させる例がないことから、ノダップI式でも新しい段階としたい。また横位の貝殻腹縁圧痕文で口縁部が装飾されるもの（図VI-11-16a、b）や、厚手で角張る口縁（図VI-11-12）は同一視することは難しいけれども、道内では区分できる資料が見当たらないため、これらを含めた本遺跡での型式名に関する検討は保留しておきたい。ここでは、出土例中に認められる貝殻腹縁文について確認し、見通しを述べる。

a) 寺の沢式の貝殻腹縁文

本遺跡の中心である寺の沢式と後の型式である吹切沢式は、いずれも貝殻腹縁文が盛行する時期にあたる。名久井文明は寺の沢相当の土器について、同型式には体部にはほとんどの場合貝殻腹縁文のみが施文されたとしている。それには「少なからぬ種類がある」と述べ、次のように説明している。貝殻を器表面にほとんど直立させるものからかなり倒して押圧するものまでいろいろな変化がある。一度の圧痕の際に角度を変えている例があり、長く連続しているように見せるものや、押圧時に振りながら引き上げるものがある。この中で、規則性があるものとして、口縁に平行する貝殻腹縁文の場合、縁辺の貝表面側を用い、必ず貝頂を下にして押圧している。縦方向ないしそれに近い貝殻腹縁の場合、縁辺の貝表面側を用い、必ず殻頂を右にしているとされている。さらに、吹切沢式と同様な手法を用いているとみられるものが1片あり、「偶然に生まれ、その後一つの手法として確立されることとなった」と想定している。寺の沢から吹切沢にいたる文様の流れを想定した。

三宅徹也はこの点を引き継ぎ、寺の沢例における胴部施文は、主に斜方向の貝殻腹縁文を全面に施文するものが多く、これに極少数の貝殻腹縁連続波状文が存在する。吹切沢式では貝殻腹縁連続波状文を全面に施文するものが多く、少数の押引文が存在する。これに後続して胴部が無文化する蛭沢ⅡAが位置することを想定し、寺の沢式における貝殻腹縁文から、その施文操作を簡略化した貝殻腹縁